日 本 独 文 学 会

春 季 研 究 発 表 会

2024 年 6 月 8 日（土）・6 月 9 日（日）

第 1 日　午前 10 時より
第 2 日　午前 10 時より

会場　慶應義塾大学
日吉キャンパス 第 4 校舎独立館

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1
E-Mail: tagung2024keio@jgg.jp

参加費
会員 1,500 円
学生会員 1,000 円
非会員（含む学生）2,000 円

日 本 独 文 学 会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603
Tel./Fax: 03-5950-1147
E-Mail（メールフォーム）: http://www.jgg.jp/mailform/buero

第 1 日　6 月 8 日（土）

シンポジウム I（14:30～17:30）

C 会場（DB203 教室）

ナチス体制下の「ふつうの人々」を 21 世紀に描く
～歴史と創作のあいだ～

司会： 伊藤 白、川喜田 敦子
コメンテーター：川島 隆

本シンポジウムは、ホロコーストを題材とした長篇小説を執筆中の現役作家の創作の取り組みを文学・歴史学・言語史の研究成果とつき合わせることによって、ナチス時代の「ふつうの人々」の 21 世紀における理解および表象のあり方を歴史と創作という観点から検討するものである。

戦後ドイツのアデナウアー政権下でナチ党幹部等の「悪人」と区別された「ふつうの人々」（gewöhnliche / normale / durchschnittliche Deutsche）は、68 年運動の際に一時的に糾弾されたものの、戦後長く罪に問われることがなかった。しかし、一般市民からなる警察予備大隊の戦争犯罪を暴いた米国の歴史家 C・R・ブラウニングの『普通の人びと』（1992）を皮切りに、ナチス体制下の市民の反ユダヤ主義が問われたゴールドハーゲン論争、親衛隊とは区別されてきた国防軍の戦争犯罪が議論された国防軍展示論争等においてテーマ化され、ナチスのイデオロギーに特段染まることがなかった「巻き込まれた」だけの人々や傍観者たちの実態が明らかにされてきた。こうした流れと平行して、1980 年代以降、ドイツ人の加害者性に自覚的な「想起の文化」（Erinnerungskultur）が社会の主流となった（A. Assmann 2013）。

しかし、2000 年代に入って、父母・祖父母の世代の「ふつうの人々」のイデオロギー性を希釈した、現代の世代にとって受け入れやすい「ふつうの人」像が生産されるという現象（テレビ映画『ジェネレーション・ウォー』（2013）等）が生じている。それまでも私的空間においては主流であった「おじいちゃんはナチじゃなかった」（Welzer 2002）という語りが公共空間に拡大し（川喜田 2018）、当時の「ふつうの人々」を「理解」あるいは「免罪」する希求が生まれていると言える。当時を知る人々が減少し、AfD の台頭によりドイツの右傾化が危惧される 21 世紀の現在、当時の「ふつうの人々」の理解・表象はこれまで以上に重要な意味を持っていると言えるだろう。

こうした中、客観的な歴史を追求しつつもその解釈には主観が入る余地があるという意味において創作に近づくこともある歴史学は、ナチス時代の「ふつうの人々」にどのようにアプローチし、どのような理解を提示するのか。そして歴史から乖離する自由を持つがゆえにこそ歴史への向き合い方が問われる創作は、「ふつうの人々」という現象をどのようにフィクションに落とし込むのか。

本シンポジウムでは、こうした問題意識に基づいて、第 1～第 4 発表者がナチズム研究、戦後史研究、言語史研究、現代ドイツ文学の立場から「ふつうの人々」という現象を論じる。そして第 5 の発表として、ホロコーストをテーマ

に長篇小説を執筆中の現役作家が「ふつうの人々」の表象の現場を語る。

【付記】本シンポジウムは JSPS 科研費 科研費基盤研究（C）21K00441・基盤研究（C）22K00514 の助成を受けた研究の一部である。

１．「ふつうの人々」をどうとらえるか――ナチズム研究の視点から

田野 大輔

近年のナチズム研究では、「ふつうの人々」の同意や協力があったからこそ、ナチ体制の犯罪が可能になったのだという見方が主流となっている。これは一般の人々の犯罪への加担を問題にするものだが、他方で加害者をごく平凡な人間として理解可能な対象とし、その責任を曖昧にする危険性もはらんでいる。

「ふつうの人々」への着眼は、1960 年代初めのアイヒマン裁判を端緒とする。「悪の凡庸さ」というアーレントの指摘は、親衛隊幹部でさえ悪魔的存在ではなく、上からの命令に従って犯罪に加担した平凡な存在にすぎないという見方に先鞭をつけた。他方、1970 年代以降の日常史の進展は、従来のエリート中心の視点を脱却して「ふつうの人々」に注目する視点を提示した。1990 年代以降には「賛同にもとづく独裁」という見方が一般化し、体制の協力者・受益者としての「ふつうの人々」の加害責任が強調されるようになった。ホロコーストについても、虐殺部隊のメンバーが一定の主体性と自由裁量をもって犯罪に加担していたことが明らかにされた。

こうした歴史研究の進展にもかかわらず、ナチ体制下の「ふつうの人々」を無力で受動的な存在として免罪化しようとする見方は根強い。これは当時の人々に感情移入して行動の動機を理解しようとする、それ自体真っ当な姿勢と表裏一体であるだけになおのこと厄介である。その困難な課題を解決する糸口を探ることが、本発表の目的である。

２．ドイツの想起の文化と「ふつうの人々」

川喜田 敦子

ドイツの想起の文化は、ナチ時代のユダヤ人大量虐殺との批判的な取り組みを基軸として形成されてきた。21 世紀に入っても、その基本的な特徴に変化は見られないが、一定の変化が生じている。

ひとつには、ナチ体制下の「ふつうの人々」の描き方に変化が見られる。1990 年代以降、「ふつうのドイツ人」のナチ犯罪への関与が焦点化されたのに対して、2000 年代以降には、„Unsere Mütter, Unsere Väter“（2013） のように、「ふつうのドイツ人」の加害行為を克明に描きながらも、「ふつう」であったことを理由にその罪を免罪するかのような作品が出現した。

また、近年、ドイツでは、「第二の歴史家論争」とも呼ばれる議論が巻き起こっている。2021 年にはジェノサイド研究者 D・モーゼスが、ドイツではホロコーストの唯一性を強調するあまり、想起のありかたが歪められていると批判した。想起のグローバル化のなかで、植民地主義の過去に注目が集まり、想起の中軸はホロコーストだという前提に疑問が付される状況が生じている。

「想起の文化」は、昨今、領域横断的に広く関心を集めるテーマである。歴

史学でも、M・アルヴァックス『集合的記憶』に始まり、P・ノラ（編）『記憶の場』で再び注目を集めて以来、「想起」が強い関心を引くようになっている。本発表では、ナチズムがもはや「体験」ではなく「想起」の対象となった21世紀における想起の文化の揺らぎについて考えてみたい。

３．「ふつうの人々」におけるナチ語彙の変奏

高田 博行

ナチ体制下の日常生活で何がどう語られたかを窺うことができる原資料がある。亡命社会民主党が1934年4月～1940年4月にドイツ国内の情報提供者による世情分析を国際的に発信した『ドイツ通信』（Deutschland-Berichte）である。Volksgemeinschaft「民族共同体」と共起する語について、この世情報告書（約220万語）と同時期のヒトラーの演説文（約45万語）の言語データとを有意差検定すると、ヒトラーにおいては「新しい」、「偉大な」、「真の」、「築く」という未来志向のポジティブな語が特徴的であるのに対して、世情報告書では「義務」、「強制」、「締め出す」、「敵」というネガティブな語が特徴的である。これは、「ふつうの人々」が「民族共同体」の一員として認知されないと大きな不利益を被ることを気にかけていた証と解釈できる。同じナチ語彙であっても、ヒトラーの演説文と「ふつうの人々」のことばとでは、語の意味（表示機能・評価機能・要求機能）にずれがある。現在のドイツに目を向けると、エリートではない「ふつうの人々」の代弁者を自認するAfDの政治家たちがナチ語彙を再使用し、言語面からナチズムを想起させる。このAfDの政治家たちがナチ語彙を口にするとき、告発を避けるべく語の意味はナチズムにおける本来の意味から巧妙に変更されている。上述の限りにおいて、本来の意味の主題にどのような変奏が加えられているのかに注目することで、ナチ語彙を（再）使用する人々の思考が露わになると言えよう。

４． 現代ドイツ文学に描かれるナチス時代の「良い」ドイツ人

伊藤 白

ナチス期を描いた近年の非ユダヤ系のドイツ文学三作品（アルノ・ガイガー『龍の壁のふもとで』（2018）、トーマス・ヘッチェ『心の糸』（2020）、ラルフ・ロートマン 3 部作『春に死す』、『あの夏の神』、『雪の下の夜』（2015～2022））を扱い、そこに描かれた、単純な加害者でも犠牲者でもないという意味においてナチス期ドイツの大多数を占めた「ふつうの人々」が、しばしば「良い」人物として描かれるという現象を考察する。ナチス期の「ふつうの人々」が「良い」人として描かれる非ユダヤ系作家のドイツ文学作品は、60 年代まで頻繁に見られた一方で、自己反省的な「想起の文化」が主流となった 1970 年代から 2000 年ごろまでは減少したか、あるいは大きな成功を収めなかった。「良い」人物がナチス期の「ふつう」のドイツ人を代表するかのような表現は、例えばスピルバーグ監督の映画『シンドラーのリスト』をクロード・ランズマンが批判したように、人々に「気休め」を与える可能性を持つ。これに対して本発表で扱う作品は、ストーリー上あるいは構造上の装置によっ

て、当時の「ふつうの人々」がみな「良い」人々であったかのような印象を妨げ、それによって単純な加害者／犠牲者の構図にあてはまらない「ふつうの」人々を繊細に描きだしている。とはいえ、近年こうした「良い」人々が当時の「ふつうの人々」として再び描かれるようになった現象は、ドイツの社会の変化を反映している可能性がある。

５． 創作側から見た「ふつうの人々」と 21 世紀に語り継ぐこと

深緑 野分

商業小説家の立場から、＜ふつう＞を重視する作品の増加にともなう、現代の人間心理に及ぼしてきた＜ふつう＞過信、＜ふつう＞バイアスについて考察、発表する。

フィクションをはじめとする創作分野において＜ふつう＞を見つめすぎた結果、弊害が生まれている。とくに近年では、ヒトラーでさえふつうの位置にまで下げることにより、親近感を抱かせ、かつてのプロパガンダのように、「悪人にも善い部分があった」「つまり、悪人は悪人ではなかったのではないか」と思いこむプロセスが成立している。

また、歴史学にもナラティブを組み込もうという動きに、一般の人々の語るナラティブとは違う、作家のような言葉の力を持つ者が語るナラティブによる扇動やプロパガンダの可能性を指摘。

人はなぜ＜ふつう＞の人々の来訪を求め、誰かにも＜ふつう＞な側面があったことを信じたがるのか。また、なぜ罪を犯した者は、告発されると自分が＜ふつう＞であると主張するのか。現在執筆中の長編作品でアウシュヴィッツ＝ビルケナウを書くにあたり、「机上の殺戮者」である SS-WVHA に勤務する SS 下級将校を主人公とし、一人称視点にすることによって、彼らの＜ふつう＞を体感するとはどういうことかをひもとく。

また、21 世紀もなお歴史を創作物に使う必要があるのか、これからの文学はどのようなことを考え、先へ進んでいくべきなのかを、現在の世界情勢を鑑みながら考察する。

シンポジウム II（14:30～17:30）

B 会場（DB202 教室）

„Früher wollte ich immer nach Asien ...“. Robert Musil in Ostasien - Transkulturalität. Rezeption. Interpretation

Moderator: Thomas Pekar

Das Konzept der **Transkulturalität**, welches das Überschreiten der Grenzen von Nationalkulturen und damit auch von Nationalliteraturen und Nationalphilologien zugunsten der Herausbildung von kulturellen Verflechtungen und Mischungsformen benennt, wird beim Symposium benutzt, um neue Zugänge zum Werk Robert Musils zu finden.

In Hinsicht auf die **Rezeption** wird danach gefragt, wie Musils Werk in Ostasien aufgenommen wurde, d.h. konkret wird seine Rezeption in Südkorea und Japan thematisiert (auf die chinesische Rezeption kann aus Zeitgründen nicht eingegangen werden; sie wird allerdings in der Einführung kurz vorgestellt). Weiter wird herausgearbeitet, wie Musil in Ostasien zum Gegenstand linguistischer sowie literatur- und kulturwissenschaftlicher Forschungen wurde. Verbunden mit dieser Rezeption sind Fragen der Musil-Übersetzung in ostasiatische Sprachen: Musils Texte stellen aufgrund ihrer eigenwilligen und extrem ausdifferenzierten Sprachverwendung ihre Übersetzer:innen vor große Schwierigkeiten und Herausforderungen, die im Symposium ebenfalls benannt werden. Gleichzeitig machen Übersetzungen auf mögliche semantische Leerstellen im Originaltext aufmerksam und sind damit auch für die internationale bzw. deutschsprachige Musil-Forschung von höchster Relevanz. Ein weiterer Themenbereich des Symposiums betrifft Musils Bedeutung für die Literatur- und Kulturentwicklung in den ostasiatischen Ländern selbst.

In Hinsicht auf die **Interpretation** der Texte Musils weist das Symposium auf eine wirkliche Forschungslücke hin und will erste Ansätze zu ihrer Schließung beitragen: Es geht um den Komplex ‚Asien‘ bzw. ‚Ostasien‘ in Musils Werk, der bislang von der Musil-Forschung stark vernachlässigt wurde. Wie ein Blick in die historisch-kritische Edition seines Gesamtwerkes in der Klagenfurter Ausgabe zeigt, hat er sich zeitlebens mit asiatischen Denkern und Religionsstiftern, wie Buddha, Konfuzius oder Laotse, beschäftigt und war an allen möglichen Fragen der europäisch-asiatischen Beziehungen interessiert. Besonders gegen Ende seines Lebens bzw. seines Romans *Der Mann ohne Eigenschaften* scheint die Bedeutung Ostasiens für ihn noch einmal zugenommen zu haben.

Insgesamt stellt sich das geplante Symposium der doppelten Aufgabe zum einen Transkulturalität in Hinsicht auf ihre (ost-)asiatische Dimension als konstitutives Element bei der Interpretation der Literatur Musils herauszuarbeiten; zum anderen betrifft Transkulturalität den Bereich der asiatischen Musil-Rezeptionen bzw. der Musil-Übersetzungen. Es ist die leitende Idee des Symposiums, dass gerade die große sprach- und kulturräumliche Distanz der ostasiatischen Rezeptionen, Übersetzungen und Interpretationen von Musils Texten kreative und innovative Prozesse bei den

gegenwärtigen Musil-Lektüren weltweit auslösen und der Musil-Forschung im 21. Jahrhundert neue Wegen zeigen könnte.

1. Koreanische Musil-Rezeption am Beispiel von Die Verwirrungen des Zöglings Törleß

Jiyoung Shin

Wenn es um die Musil-Rezeption in Korea geht, kann man feststellen, dass bis zur Veröffentlichung von *Der Mann ohne Eigenschaften* auf Koreanisch (2023), seine kleineren Prosawerke sowie sein Debütroman *Die Verwirrungen des Zöglings Törleß*, im Mittelpunkt standen. Der *Törleß*-Roman ist in Korea längst ein fester Bestandteil des Deutschunterrichts, es liegen vier Übersetzungen und seit dem Jahr 2000 insgesamt 12 Abhandlungen über den Roman vor. Abgesehen von drei Aufsätzen ist in der *Törleß*-Rezeption seit 2010 eine Tendenz zu erkennen (4 Titel), die den Roman als Schul- und Adoleszenzroman betrachtet. Das Interesse an dem Roman aus dieser Perspektive ist durch die steigende Gewalt an koreanischen Schulen und die hohe Selbstmordrate unter koreanischen Jugendlichen geweckt worden, ein Aspekt, der auch zu einer Einschränkung für die Musil-Forschung in Korea werden könnte. Daher ist eine andere Richtung der Untersuchung, die besonders seit den letzten fünf Jahren zu beobachten ist, positiv unter dem Gesichtspunkt der Musil-Forschung zu betrachten. Diese Untersuchungen beschäftigen sich nicht mit Milieu und Alter der Protagonisten, sondern mit der Schreibweise und Zeitdiagnose Musils. Die *Törleß*-Rezeption jüngsten Datums zeigt, dass Musil sich aus dem einzelnen thematischen Interesse herauslöst und zur Musil-Forschung übergeht. Man kann also sagen, dass Interesse an Musils Werken sowie an seinem literarischen Konzept und seinen Ideen insgesamt besteht

2. Die Genauigkeit der Forschung und die Seele der Kritik — Zu zwei Ausrichtungen der Musil-Rezeption in Japan

Minami Miyashita

Die japanische Übersetzung von *Der Mann ohne Eigenschaften* wurde 1966 von acht Germanisten in Zusammenarbeit ausgeführt. Dabei beschränkte sich die Beteiligung von Takahashi Yoshitaka, dem Leiter des Übersetzungsteams, auf beratende Tätigkeiten. Der wesentliche Übersetzungsprozess wurde tatsächlich von seinen jungen Schülern durchgeführt. Für Takahashi ist die Germanistik mit dem Bildungsidealismus verbunden, bei dem Goethe und Thomas Mann auf dem Gipfel stehen. Die Auseinandersetzung mit Musil wurde somit für die jüngeren japanischen Germanisten zu einem entscheidenden Anlass, den Rahmen eines solchen Bildungsidealismus zu sprengen.

Unter den Übersetzern beschäftigten sich besonders Maruko Shūhei und Kawamura Jirō in ihren langen Karrieren weiterhin mit Musils Werken. Maruko orientierte sich hin zur philologischen Forschung und übersetzte auch die Tagebücher und Briefe von Musil eigenständig ins Japanische. Die Früchte dieser Arbeit machte er auch seinen Studenten

für die Lektüre von Musils Novellen zur stilistischen Analyse nutzbar. Kawamura betont hingegen in seiner literarischen Kritik die Wichtigkeit, die Affinität zwischen Musils literarischer Weltsicht und der breiteren Strömung der japanischen Literatur nach der letzten Hälfte der 60er Jahre, der „introvertierten Generation“, zu erkennen. Durch Marukos Forschung und Kawamuras Kritik wurde bei der Musil-Rezeption in Japan eine umfassende Weltauffassung herausgearbeitet, die dem typischen Motto des Autors, der „Genauigkeit und Seele“ fordert, entspricht.

3. Musil-Rezeption in Japan. Kenichirō Isozakis Roman Tsui no Sumika (2009) als Beispiel

Mototsugu Katsura

Der japanische Autor Isozaki Ken‘ichirō (1965-) bekennt, neben Garcia Marquez und Kafka, durch die Lektüre von Musils *Drei Frauen* in der Übersetzung von Kawamura Jirō stark beeinflusst worden zu sein. Er hat jedoch die Texte von Musil nicht wissenschaftlich erforscht oder übersetzt, wie es bei Furui Yoshikichi der Fall war. Der Roman *Tsui no Sumika* (*Das letzte Heim*, 2009) erinnert in vielen Punkten an Musils *Tonka*. Was Isozaki von Musil ganz wesentlich übernommen zu haben scheint, sind, wie er schreibt, die „abrupten, aber brillanten Sprünge“ des Ausdrucks, die bei Musil immer wieder in seinen Romanen zu finden sind. Isozaki selbst sagt, dass seine Romane aus „Aufeinanderhäufen von Konkretheiten“ bestehen. In seinen Romanen folgen auf Wörter wie „man weiß nicht warum“ und „unglaublicherweise“ eine Reihe von Bildern, die sich nicht durch kausale Zusammenhänge erklären lassen. Damit gibt Isozaki eine Perspektive, die einzelne Szenen von umgebenden Verhältnissen trennt und plötzlich zum „anderen Zustand“ führt. Isozakis Methode, den Roman durch die Konstellation angehäufter konkreter Bilder zu erzählen, ist in der japanischen Literatur, die eine starke Tradition des Ich-Romans kennt, neben Furui einzigartig und zeigt eine der Möglichkeiten auf, wie Musil in Japan rezipiert wurde.

4. „Meine Reinlichkeit heute noch eine Überkompensation?“ — Krankheit und Körper bei Robert Musil im Zeitalter des wissenschaftlichen Umbruchs in Ostasien und Europa

Manuel Kraus

In einer ersten Fassung seines Vortrags *Rede auf dem Internationalen Schriftstellerkongress für die Verteidigung der Kultur* vermerkt Robert Musil 1934/35 bewusst, sich „niemals über Hygiene öffentlich geäußert“ und „zum Hygieniker […] wenig Talent“ (KA/Mappe VI/1/65) zu haben. Die Analyse seines Werks führt jedoch vor, dass eine Großzahl von Reflexionen vorliegen, die sich mit dem Thema Hygiene und Körperpflege beschäftigen und in vielen Fällen mit dem Schlagwort Krankheit verbunden sind, wie es der klassische Hygienediskurs des 19. Jahrhunderts als diskursives Immunsystem der Gesellschaft noch verdeutlichte.

Dabei verfährt Robert Musil auch transkulturell, indem er sich etwa mit dem Begriff „Hata 606“ in Kapitel 54 von *Der Mann ohne Eigenschaften* auf den japanischen Bakteriologen Sahachiro Hata bezieht, der zusammen mit Paul Ehrlich 1910 die „Zauberkugel“ Salvarsan gegen die Syphilis entwickelt hatte, unter der Musil selbst leiden musste.

Indem Robert Musil eine Sprache über den überreizten Menschen im Staatskörper zu etablieren versucht, fungiert sein Werk als Transfluenz zwischen wissenschaftlicher, populärwissenschaftlicher sowie politischer Repräsentationsform, bei der die Grenzen zwischen Gesundheit und Krankheit verwischt werden.

Der vorliegende Beitrag zeigt Schnittstellen auf, die sich im Umbruch des wissenschaftlichen Hygienediskurs in Europa und Ostasien im 19. und 20. Jahrhundert finden. Daraus sollen sich neue Möglichkeiten für eine mehr transkulturell orientierte Musil-Forschung öffnen.

５. Robert Musils chinesisch inspirierte Utopie der Höflichkeit

Thomas Pekar

Die Beziehungen Robert Musils zu Ostasien sind komplex und harren z.T. auch noch ihrer Erforschung. Insbesondere gegen Ende von Musils Leben und damit gegen Ende seines Schreibens an seinem Roman *Der Mann ohne Eigenschaften* intensiviert sich die Bedeutung Ostasiens für ihn und den Roman im Zusammenhang mit seiner Öffnung zur Gesellschaft und der damit verbundenen Integration zeithistorischer bzw. weltpolitischer Fragestellungen in ihn. Dem entsprechen Notizen Musils zu einem möglichen Romanschluss, in denen er über China reflektiert.

Diese chinesisch inspirierte ‚Utopie der Höflichkeit‘ gehört zu dem Geflecht utopischer Konzepte, die in den späteren Fassungen des *Mann ohne Eigenschaften* gehäuft auftauchen, hat aber darüberhinausgehend auch eine fundamentale Bedeutung, da sie als eine notwendige, d.h. der Struktur der Welt entsprechende Haltung angesehen wird. Besonders dieser Aspekt bei der Aufnahme der Höflichkeits-Utopie soll in meinem Beitrag thematisiert werden.

Der Bezug Musils auf China an dieser exponierten Stelle gegen Ende seines Romans, der durch Hinweise auf frühere Thematisierungen etwa von chinesischen Philosophen wie Laotse und Konfuzius bei ihm im Zusammenhang mit ethischen Diskussionen ergänzt werden soll, lässt sich grundsätzlich als ein transkultureller Zug von Musils Schreiben verstehen, insoweit er damit die Grenzen seiner eigenen Kultur überschreitet und sich um ‚weltkulturelle‘ bzw. universale Perspektiven bemüht.

口頭発表：文学、文化・社会 **I**（**14:30**〜**17:45**）
A 会場（**DB201** 教室）

司会：山本 賀代・山口 祐子

１． **1800** 年前後のアレゴリー再評価と後期ヘルダーリンの詩学をめぐって

大田 浩司

1800 年前後のフリードリヒ・シュレーゲルやシェリングに見られるアレゴリー再評価は、古典古代と近代の歴史的差異についての認識と深く結びついていた。キリスト教以後の芸術における核心的内容を成す無限の絶対者は、感性的形式によって直接的に表現することが不可能となったというのが彼らの共通認識であった。「意味するもの」と「意味されるもの」の乖離によって特徴付けられるアレゴリーは、無限の絶対者を間接的に呈示する形式にほかならない。

後期ヘルダーリンもこの問題意識を共有し、詩論においてアレゴリー的表現について理論化している。論考『一般的根拠』（1799）では、無限なるものは、詩人独自の世界の外部に見いだされる「より大胆で異質な比喩や実例」としての像によってただ間接的にしか呈示されないとされる。論考『悲劇の意味』（1802/03）では、表現されるべき「根源的なもの」は「隠れた根底」にとどまりそれ自体として顕わとなることはなく、それ自体では無意味なしるしの痕跡を通じて呈示されるといわれる。これらの論考でヘルダーリンはアレゴリーという語を使用していないが、彼の念頭にある表現形式の多くはアレゴリー的特徴を帯びており、また後期詩作ではアレゴリー的表現を効果的に使用している

１8 世紀ドイツのさまざまな思想家・文学者における象徴とアレゴリーの思想を論じた研究として、Sørensen（1963）、Todorov（1977）、小田部（1995）が存在するが、彼らはヘルダーリンについては扱っていない。Böschenstein-Schäfer（1977, 1988）、Haverkamp（1991）、Geisenhanslüke（2012）はヘルダーリンの詩におけるアレゴリー表現を論じているが、シュレーゲルやシェリングらの 1800 年前後のアレゴリー概念とヘルダーリンとの関係について論じておらず、またホンブルク期以降の詩論とアレゴリー概念を結びつけていない。本発表の目標は、ヘルダーリンのアレゴリー概念を初期ロマン派の思想やシェリングの観念論哲学と関連付け、またホンブルク期以降の詩論をアレゴリーという観点から読み解くことで、ヘルダーリン研究に新たな光を投じることにある。

２． **Die Last der Antike — Hölderlins Auseinandersetzung mit dem Winckelmann’schen Klassizismus**

Oliver Grütter

Gegenstand des Vortrags ist eine Reihe von Texten Friedrich Hölderlins (Briefe und theoretische Schriften), die für seine Auseinandersetzung mit der klassizistischen Theorie um 1800 einschlägig sind. Auf dieser Grundlage möchte ich ein bislang kaum hinterfragtes Forschungsnarrativ, wonach Hölderlin im klassizistischen Feld der Sattelzeit eine oppositionelle Haltung eingenommen habe (Peter Szondi), einer systematischen Kritik unterziehen. Zu diesem Zweck konstelliere ich Hölderlin mit

Johann Joachim Winckelmann, dessen Kunstgeschichte der Autor für sein Magister-Specimen von 1790 verwertete und daher als bestimmend für seine klassizistische Anschauung gelten darf. Gegen Szondis These einer ›Überwindung des Klassizismus‹ möchte ich zeigen, dass Hölderlin – mit Winckelmann – den Weg von einem Nachahmungs- zu einem historischen Klassizismus beschreibt, der an die zeitgenössische Debatte um ästhetische Autonomie zurückzubinden ist. Thematisch schließt der Vortrag damit an meine früheren Arbeiten zu Hölderlins Rezeption der römischen Literatur an.

３．『悲劇の誕生』と概念メタファー――ショーペンハウアーの意志形而上学の援用を巡って――

前川 一貴

ニーチェの著作は主に断章形式が取られるなかで、『悲劇の誕生』は比較的体系立てて論述されており、レトリックという観点からはあまり注目を浴びてこなかった。とりわけラクー＝ラバルト（1971）とコフマン（1972）は、同書がショーペンハウアーの意志形而上学に依拠している点を問題視して、実体としての「意志」と仮象としての「表象」という二項対立があるゆえに、言語が「意志」を間接的に描写するものに過ぎなくなっていると批判した。さらにド・マン（1979）は、同作の説明的な叙述がディオニュソス的な意志の内実を言い表すものとして不適切であると断じた。

だが、この書はすでにアカデミックな形式を大きく逸脱しており、それ自体で十分な魅力を具えていよう。そこで問題になるのは、そもそもニーチェは本当に「意志」の実在性を認めていたのかである。もしかしたら彼にとって重要だったのは、意志が実在しているかのように思わせることであり、ショーペンハウアー哲学の概念図式を転用したのは、ディオニュソス的なものという名状しがたいパトスに形を与えるためだったのはないか。本発表では、このような隠喩の認識論的機能について分析したレイコフ＆ジョンソン（1980）の学説を応用し、ニーチェが概念メタファーによって美学的感性の拡張や構造化を図っていたことを示したい。

４．初期ベンヤミンの歴史概念　リッケルトへの批判に着目して

寒河江 陽

ヴァルター・ベンヤミンの歴史概念は、晩年の『歴史哲学テーゼ』（1940）、特に「歴史の天使」が現われる第 9 テーゼから分析されることが多い（Mosès; 1994）。一方では Ginzburg（2012）や Sikora（2019）に見られるように歴史認識の方法論の観点から、他方では Weigel（2013）に見られるようにユダヤ神学やマルクス主義の観点から分析されてきた。また、Habermas（1972）は、こうした晩年の歴史哲学の雛型は、青年期のベンヤミンの小論考「学生の生活」（1914/5）にすでに見られると指摘している。そこでは、均質化された科学的

時間、および歴史主義に対する批判が展開されており、この論点はそのまま『歴史哲学テーゼ』に引き継がれている。ここから、多くの先行研究は（志喜屋：2021、柿木：2021 等）、後期の歴史哲学テーゼから初期の歴史哲学を解釈するという方法を取ってきた。

ところで、ベンヤミンは、新カント派、特に西南ドイツ学派に属するハインリッヒ・リッケルトのゼミに出席しており、そこで彼から歴史哲学や価値哲学を学んでいる。リッケルトは、科学的時間や歴史主義を批判し、独自の価値哲学の構築を試みるなど、多数の業績を上げており、リッケルトの歴史科学の方法論が若きベンヤミンに与えた影響はこれまでも分析されてきた（Procyshyn; 2013, Lavelle; 2014）。だが、ベンヤミンが、1913 年の書簡中において、価値哲学の文脈において、リッケルトの女性概念を批判していた事実は等閑視されている。そして、リッケルトの女性概念が彼の価値哲学とどのように繋がるのかといった研究も、不思議と見られないのである。本発表が着目するのは、ベンヤミンがリッケルトの女性概念を批判していた事実であり、そのことが、彼の歴史哲学につながることの意義である。

ここから本発表では、初期ベンヤミンの歴史概念が、彼独自の歴史哲学構想に基づいており、それがリッケルトの価値哲学への批判にも通底していると示し、ベンヤミン歴史哲学研究に新たな光を当てることを目指す。

口頭発表：語学（14:30～16:25）

D 会場（D101 教室）

司会：横山 由広・吉村 創

１．Sprachwandel und Variation im Deutschen: Wie kann der DaF-Unterricht mit neuen Formen gendergerechter Sprache umgehen?

Angela Lipsky

Die öffentliche Diskussion um Geschlechtergerechtigkeit und diskriminierungsfreie Sprache hat bereits zu starken Veränderungen in der deutschen Sprache geführt und zu einer Vielfalt an Formen für Personenbezeichnungen. Obwohl die Schreibungen mit Sonderzeichen wie Genderstern oder Doppelpunkt noch nicht zur amtlichen Rechtschreibung gehören, haben sie sich in zahlreichen Textsorten schon fest etabliert (s. z. B. Ferstl & Nübling 2024). Aufgrund dieser Entwicklung sind derzeit verschiedene Schreibstile zu beobachten (s. Kotthoff 2020).

Auch neueste Lehrwerke für DaF bilden den Sprachgebrauch teilweise ab und variieren Personenbezeichnungen. DaF-Lernende können daher frühzeitig mit verschiedenen

Varianten im Input konfrontiert werden und gendergerechte Sprache ist sowohl für die Sprachvermittlung als auch die Landeskunde ein relevantes Thema geworden (s. Peuschel 2022).

In dem Vortrag möchte ich folgende These vertreten: Wie auch in Zusammenhang mit anderen Arten sprachlicher Variation (z. B. soziale und regionale Varianten) sollte sich der Sprachunterricht nicht nur an einer „gereinigten Variante“ (Rösler 2023: 145) orientieren, sondern Lernende auf den tatsächlichen Sprachgebrauch vorbereiten und ihnen situationsangemessene und für die eigene Redeabsicht passende Sprachformen vermitteln. Wie dies konkret im Unterricht umgesetzt werden kann, wird anschließend an einigen Beispielen verdeutlicht.

Lit.
Ferstl, Evelyn & Nübling, Damaris (2024), Sonderzeichen als typographische Kennzeichnung geschlechtersensiblen Sprachgebrauchs. Linguistische Überlegungen und experimentelle Befunde zum Genderstern. In: Krome, Sabine et al. (Hrsg.): *Orthographie in Wissenschaft und Gesellschaft. Schriftsystem – Norm – Schreibgebrauch*. IDS-Jahrbuch 2023. Berlin/Boston, 259-284.

Kotthoff, Helga (2020), Gender-Sternchen, Binnen-I oder generisches Maskulinum, ... (Akademische) Textstile der Personenreferenz als Registrierungen? *Linguistik online* 103, 3, 105-127.

Peuschel, Kristina (2022), „Keine größere Hürde als... – gendergerechte Sprache im Deutschen aus der Perspektive des Lehrens und Lernens”. *Aus Politik und Zeitgeschichte (APuZ)*, 72 (5-7), 49-54.
Rösler, Dietmar (2023), *Deutsch als Fremdsprache: Eine Einführung*. (2. Aufl.) Stuttgart: J.B. Metzler.

２．不定形で現れる **sein + zu-Infinitiv** について

横田 詩織

ドイツ語の sein + zu-Infinitiv（以下 **szI**）は可能や義務といったモダリティの解釈を有する表現である（Kolb 1966, Brinker 1969 et al.）。当該表現が形式の面でモダリティを明示する要素を持たないにもかかわらず、話法の助動詞さながらにモダリティの意味を示しうる要因として、不定詞の形で現れている動詞が zu によって現実から切り離されていることによるという指摘が為されている（Eroms 2006, Abraham 2012）。
さらに **szI** は zu-Infinitiv の中に不定形で現れることはできないという制約を有しているため、定形で用いられるという点も先述の点と協働してモダリティの意味の創発に関与している可能性が考えられる。

しかし、szI の用例を観察すると、話法の助動詞や完了の助動詞と共起することにより不定形で現れる場合があることがわかる。

本発表では、助動詞と共起するなどの要因によって不定形で現れる **szI** に着目し、①当該表現が不定形で現れる場合、その意味や共起する表現に関してどういった特徴が見られるのか、②当該表現が定形で用いられるのはモダリティの意味の創発の要因であるのか、そうであれば不定形で現れる **szI** のことはどう考えるべきかという二点について論じる。

３． ドイツ語における与格交替―― an-前置詞句の生起条件

大矢 俊明

近年，ドイツ語においても(1)のペアにみられるような，いわゆる与格交替(dative alternation)の研究が進展しつつある(Adler 2011, Rauth 2020 など)。

(1) a. Sie schickte *dem Beamten* den Brief.
b. Sie schickte den Brief *an den Beamten*.

本発表では，(1b)にみられる an を主要部とする前置詞句の生起条件を議論する。具体的には，この前置詞句は(2)の「方向の補足語」と同じタイプのものなのか，また(3)のように bringen は与格目的語を持つことができるが，なぜ an-前置詞句を認可しないのか，geben が an-前置詞句を伴う(4a)は容認されないのに対して，(4b)のように前綴り zurück-を伴うと an-前置詞句を持つことができるのはなぜか，といった問題を扱う。

(2) Sie legte das Buch *auf den Tisch*.
(3) a. Sie brachte *dem Beamten* das Paket.
b. *Sie brachte das Paket *an den Beamten*.
(4) a. *Sie gab das Kleid an ihre Schwester.
b. Sie gab das Kleid an ihre Schwester *zurück*.

本発表では(1b)の an-前置詞句は(2)の auf den Tisch とは異なる統語的位置を占めていること，(1a)と(3a)の与格目的語は異なる統語的位置を占めており，an-前置詞句は前者とのみ交替可能であること，(4b)の an-前置詞句は前綴り zurück-の意味構造により認可されることを主張する。

ブース発表 （15:30～17:00）

（ブース発表は途中での出入り自由です）

E 会場（D201 教室）

AI を利用した音読指導――Microsoft Teams の「音読の練習」を利用して

三澤 真

音読の個別指導は、集団授業においてはさまざまな制約から非常に困難であり、詳細に評価し助言をすることは不可能であろう。本発表は、 Microsoft Teams for Education（以下 Teams）の「音読の練習 Reading Progress」機能によりこの問題に対応する活用事例を紹介するものである。

従来、音読の練習や指導は授業時間内に行われており、外国語や国語科の指導書籍でもこの枠組みでの指導方法が紹介されてきた。スマートフォンの音声認識機能の活用や LMS を利用した録音データの課題提出などの試みも模索されたが、コロナ禍のリモート授業においても広く普及しなかったのは、従前の問題を解決できなかったからであろう。

Teams の「音読の練習」では、学習者は周囲の反応を心配せずに発音することができる。提出された音声には、AI が正確性と単調スコアの判定を行う。学習者には録音に基づいて練習が必要な単語が提案され、それを訓練する機能も備える。課題の配布・回収・集計は Teams で実行するので、教師側の負担はそれほど増えない。

本発表では 2022・23 年度の使用実績を提示し、AI による判定の妥当性と授業での活用法について意見交換を行う。また、課題準備の工夫や課題配布の失敗例を紹介する。発表会場での動作確認を希望する場合は、事前に所属機関の ID と Teams アカウントの有無の確認をお願いしたい。本機能の簡易代替版である Word Online も紹介する。

ポスター発表（13:00～14:30）

（ポスターは期間中を通じて掲出されています）

F 会場（日吉コミュニケーションラウンジ）

Absicht und Empathie in der Bewegungskodierung: Eine kontrastive Analyse von „kommen“ und „gehen“ im Deutschen und Japanischen

Liang Qi

Diese Studie knüpft an frühere Forschungen zur Bewegungskodierung an, die sich vor allem auf die typologischen Unterschiede zwischen verb- und satellitenrahmenden Sprachen konzentriert haben. Wir legen einen Schwerpunkt auf die Rolle pragmatischer Faktoren, die bisher wenig Beachtung gefunden haben. Wir erweitern das Modell der Bewegungskodierung durch die Einbeziehung der Absichten und Empathie, die sowohl die kognitive als auch die kommunikative Repräsentation von Bewegungsereignissen beeinflussen. Darüber hinaus führen wir eine kontrastive Analyse von „kommen“ und „gehen“ zwischen Deutsch und Japanisch durch, die zwei Sprachen, die sich nicht nur in ihrer typologischen Klassifikation, sondern auch in ihren pragmatischen Prinzipien für die Bewegungskodierung unterscheiden. Diese kontrastive Analyse ermöglicht die Beobachtung, wie das Modell in verschiedenen Sprachen funktioniert, und die Identifizierung von Aspekten, die sprachspezifisch oder universell sind, und somit einen reicheren Datensatz für die Verfeinerung des Modells liefern.

第 2 日　6 月 9 日（日）

シンポジウム III（10:00～13:00）

A 会場（DB201 教室）

言［こと］は事［こと］なり：関口存男文例集の活用をめぐって

司会：田中 愼

大正末期から戦後にかけて教鞭を執り，数多くの後進を育成した天才ドイツ語学者関口存男が膨大なドイツ語文例集を作成していたことは広く知られている。この文例集は，近現代ドイツ語を中心に，中高ドイツ語・古高ドイツ語の他，15 言語以上の言語現象を縦横無尽に取り上げているものであるが，冊子体としては 3 部しか存在せず，利用の可能性は極めて限定されている。このような現状の中，文例集のデータ化が細々と行われている。2019 年には，内堀氏が大阪大学に残された資料をもとにデータ化をすすめウェブ上の公開を開始している。また，慶応義塾大学でも，日吉に残されたオリジナルの資料の電子化を進めるプロジェクトを進めている。

本シンポジウムは，この文例集のさまざまな活用方法を明確にする目的で行われるものである。関口の文例集は，単にドイツ語の文法的な事象を記述しただけではなく，その欄外のメモ書き等にも，関口のさまざまな葛藤や，関口が何を受容していたのかなどの情報が詰まったものである。

本シンポジウムの 4 つの発表は，この関口文例集とさまざまな立場から auseinandersetzen するものである。前半の二つの発表は，これまでも関口文法と正面から取り組んできた研究者によるものである。

第一発表の佐藤は，おそらく現在，関口文例集の価値をもっとも正確に判断できる研究者の一人である。シンポジウムの導入となる佐藤発表では，関口文例集の実像を描き出した上で，その課題（普及や利用，そしてその正確な理解）について論じることとなる。

第二発表の内堀は，関口文例集のデータベース化をリードする研究者である。文例集はいうまでもなく大変に貴重な資料であるが，その資料もアクセス可能になってはじめて意味を持つ。内堀はウェブサイトから誰でもアクセスできる文例集の構築に取り組んでいるが，この試みは，研究資料を整理された形で広くアクセスできるプラットフォームを作るデジタルヒューマニズムの可能性を提示するという意義も持つ。内堀は，非学会員であるが，関口文例集に関しては他に例を見ないレベルでの具体的な成果物を公開しており，その経験は，本シンポジウムにとって必要不可欠であり，余人をもって代えがたい。

後半の二つの発表は，若手研究者によるものである。この際，自身の取り組む具体的な研究課題について「関口（文例集）ではどのように記述されているか」という視点から研究発表を行う。

第三発表の横田は，再帰表現のさまざまな機能について，日本語の「～られる」との対照を通して記述を試みるものである。ドイツ語と日本語の間の対照研究においては，「そもそもそれらは比較可能なものなのか」という疑問があ

るが，この疑問について，関口の雑多なものを含む文例集は，統合文法的な視点から一つの答えを提示してくれるものである。

第四発表の出島は，関口の用語である「単回遂行相動作」についての統合文法的アプローチを敷衍し，その応用可能性を探るものである。関口の文法は特定の品詞や形式に囚われることなく，その機能から幅広い言語現象を記述するものであるが，出島はこのアプローチを批判的に発展させることを試みる。

１．「関口存男文例集」の「目指したもの」と「これから」

佐藤 清昭

関口存男は，「わたしはどういう風にして独逸語をやってきたか？」というエッセイの中で「文例集」について次のように述べている：「三十歳になる前頃，.....ドイツ語でめしを食うことに決心した或る日，わたしは.....一大ドイツ語論を書くことを思い立ち，それからのちは，わたしがその時まで無意識に機械的にやっていた勉強法を，いよいよ合理化してノートにとることにしました。.....それは実に混沌たり鬱蒼たる，ジャングルのごときノートです。三十年近くの間，毎日毎日，丹念に書きためた，但し私以外の人には恐らく利用のできない一種異様なノートです。」

関口存男の意味形態文法は「統合的（synthetisch）」な観点に立つものである。つまり関口文法の基礎には常に，「（言語的に表現しうる）普遍的な思考内容」から「各個別言語の文法表現手段」にいたる，という研究の方向が存在している。その際に関口の「確信的な拠り所」となったのは，関口が「探求的」に収集し続けた文例であった。

本発表の目的は，次の三つの疑問に答えることにより，「関口存男文例集」の価値を再認識し，その建設的な利用の端緒を開くことである：（1）文例は，どういう経緯で収集されるようになり，その目的は何であったのか？（2）文例は 88 のテーマに分類・ 整理されているが，この分類は，文例収集の目的に即したものであるか？（3）文例集を他の研究者が利用することは可能か？

２．「混沌たる」文例集が開く言語学の可能性――文例集×（かける）デジタルヒューマニティーズの試み

内堀 大地

関口存男の残した「実に混沌たる，鬱蒼たる」文例集は，多くの可能性を秘めているが，関口以外には扱いが難しいのも事実である。

関口の文例集は歿後にその価値が見出され，ご遺族の尽力もあり，孫である関口一郎氏（元教授）の在籍していた慶應義塾大学に原本が，大阪大学および浜松医科大学に複写が寄贈された。大阪大学にはスキャンされたデジタルデータも存在している。発表者は2016年に全データを受領し，2021年にウェブ上で全てのファイルを公開した。

関口しかアクセスできなかった文例集の原本と複写を大学に寄贈し，多くの人がアクセスできるようにしたのを第一段階とすると，現在は全世界の人々がインターネットを介してアクセスできるようになった第二段階にまで到達した

と言える。しかし，文例集をさらに扱いやすくするためには第三段階，第四段階の作業が必要である。

発表者は，近年注目を集めているデジタル・ヒューマニティーズの手法を用いて，必要な情報が取捨選択しやすいフォーマットにすることを，第三段階の一つの形として提案する。

文例集は関口文法やドイツ語研究のみならず，言語学一般へ寄与する可能性がある貴重な資料である。扱いやすいプラットフォームを整備することは，文例集にアクセスすることができる我々の責務であると考える。

３．再帰構文の機能の広がりについて――日本語の助動詞ラレルとの対照を通して

横田 詩織

同一の意味内容が個別言語によって異なる意味形態で表されるという関口の統合文法的な考えは，彼が収集した文例集からも見て取れる。例えばドイツ語の再帰構文は再帰的，可能，反使役，内在的再帰の四つの解釈を有するとされ（Steinbach 2002），文例集でもその解釈に応じて分類されている。その際，関口はドイツ語の例に加えて，同様の意味内容を有する他言語の例を挙げており，同一の意味内容が言語によって様々な形態で表されることを示している。例えばドイツ語で再帰構文が表す意味内容の一つである反使役は，日本語では「上げる」に対する「上がる」のような動詞の語幹交替によって表されるとされている。

この関口の統合文法的な考え方は，現代言語学において言語表現を比較する際では標準的な考え方であると言える。柴谷（1997）や Oya（2019）は日本語の助動詞ラレルとドイツ語の再帰構文との比較可能性を示唆しているが，これは関口の意味内容と意味形態の関係の一つの例として捉えることができるだろう。一方で，（意味）形態は個別言語的なものであるため，両表現の間には差異がある。助動詞ラレルは可能の解釈の他に自発，受身，尊敬の解釈を有するが，可能の解釈一つを取り上げても共起可能な副詞や主語の性質に差異が見られ，両者が完全に一致するとは言い難い（Oya 2019）。

本発表はドイツ語の再帰構文と日本語の助動詞ラレルに着目し，両者が担う意味内容の重なりと差異について論じることを目的とする。

４．関口存男の「単回遂行相動作」の記述概念

出島 恒太郎

本発表では，関口存男の独自の概念である「単回遂行相動作」についてその言語記述における有用性についての検討を行う。関口は「意味形態」「単回遂行相動作」を，「開始・遂行・終了」の三段階から成り立つ「**多少にかかわらず迅速に展開する一回きりの劇的“三相経過„」**を表す瞬時的な出来事であると定義している。

発表では最初にこの記述概念を類似するいくつかの言語学概念と照らし合わせ，その特徴をあぶりだす（”Achievement”, “Accomplishment”, (Vendler

1957), ”Semelfactive” (Comrie 1976; Smith 1991), “Resettable event” (Talmy 1985), “Cyclic event” (Croft 2012) など）。

関口は単回遂行相動作の実現形に実に広範な言語現象を想定している（例：回数を表す副詞 (ein)mal や擬音副詞など）。不定冠詞（あるいは数詞 ein ）を伴う名詞句もその実現形の内の一つである。アスペクトと冠詞，すなわち動詞と名詞領域という，べつべつの品詞カテゴリーに属するもの同士の交錯に着目するのは，関口の「統合文法 (die synthetische Grammatik)」の精神に基づいた言語記述であると言え (cf. Tanaka 2013) ，関口の言語観を体現している。発表では，文例集の中の例文からもいくつか取り上げ，関口が「単回遂行相動作」概念で意図したものの実態に迫ってみたい。

シンポジウム IV（10:00～13:00）

C 会場（DB203 教室）

ロマンティック・ラブの出発点／消失点としての結婚
1800 年前後の文学・芸術を例に

司会： 宮下 寛司

このシンポジウムでは、近代西洋におけるジェンダー関係の規範といわれるロマンティック・ラブの今日的な課題を、その出来時期である 1800 年前後に遡り検討する。社会における様々な異性愛的関係の批判的問い直しは現代的な課題である（Vgl. Pateman 1988; Illouz 1997）。婚姻関係の社会的基礎となるロマンティック・ラブは、ルーマンやギデンズなどの社会学者によって提唱された術語であり、多様なジェンダー・アイデンティティやセクシュアリティを周縁に追い込み、家族を構成するための異性愛的秩序が支配的になったことが強調される。すなわちロマンティック・ラブに対する批判によって、夫婦になるための限定的なジェンダー主体を生み出す装置からの離脱が目指される。

ロマンティック・ラブの系譜をたどるための社会学的言説分析には文学作品が多く用いられてきた。社会学者のラインハルト＝ベッカーらは文学作品を他の社会的言説と比較することを、当時の人が愛の理想と実態の間に挟まれた反応を読み解けるメリットがあると評価している（Becker und Reinhardt-Becker 2019）。1800 年前後は市民社会が到来する時代とされ、そのために必要不可欠な個人の自由を尊ぶ言説が登場する。これが両性の自然な出会いと自発的な合意に基づく結婚というロマンティック・ラブの理想的言説を導く。しかしながら実態としてそのような自由が実現していたとは言えず、18 世紀的な因習は温存されその理想の成就を阻んだ。文学作品は、理想が実現しえない中でなおもロマンティック・ラブを描くという矛盾を内包しているといえる。

このシンポジウムでは文学と芸術が示すロマンティック・ラブに内在する 4 つの矛盾（自己決定、公共圏／親密圏の角逐、階級と金銭をめぐる障壁、ジェンダーとセクシュアリティ）に着目しそれぞれを論じていく。その矛盾をきっかけにして作品を検討することで、規範的な読解において見過ごされてしまう

ようなジェンダー関係の描き方を析出したい。それにより今日的なジェンダー関係の批判に資するような契機へと結び付けることを目指す。なお、階級と金銭をめぐる障壁を扱う文学作品を論じるために、そのテーマがドイツ文学に比べれば頻繁に描かれるイギリス文学の研究者に参加してもらう。田中は、親子や階級によるロマンティック・ラブ・コードの違いにより、結婚が成就されないさまを示す。中村は、個人的な関係である愛による親密な関係が、当事者以外から得られる承認を成立要件としていることを示す。三觜は、ロマンティック・ラブ台頭の時代の英国小説に遡ることで、自然な愛情による近代的な結婚が潜在的に内包する矛盾を示す。宮下は、ロマンティック・バレエにおける純粋な記号としてのアラベスクが、踊る女性身体を観客の男性的欲望から逸脱させることができる契機を持つことを示す。

１． J. M. R.レンツ『軍人たち』（1776）における結婚の失敗――自己決定するヒロイン

田中 潤

家族の経済および社会的利害に基づく結婚から、男女の出会いと自発的恋愛に基づく結婚を尊ぶ価値観への変遷は、1800 年前後の市民社会並びに市民家族の形成と併せて論じられる。結婚が愛と性との関係で語られる際に、個人の感情や自由な意思決定は重要な役割を果たす。こうした問題を扱った文学作品の一例として、装身具商の娘マリーが軍人貴族デポルトからの愛を確信し結婚を試みる、レンツの喜劇『軍人たち』が挙げられる。

マリーには恋人がいるが、父ヴェーゼナーが営む装身具店をデポルトが訪れたことを機に事態は一変する。父は軍人の誘惑による家族崩壊の危険性を娘に諭すが、彼女は「わたしのことは、わたしに世話をさせて」（Lenz 1987, S. 197）と言い放つ。彼の手紙と贈り物から二人は彼女への愛を読み取り、結婚へと突き進む。借金を理由に夜逃げしたデポルトからの愛を確かめるため、彼女は家を飛び出すが、後に川辺で父親に物乞いの姿で発見される。

これまでの研究では、軍人の妻帯に関する作品内の改革案、演劇史への位置づけ、登場人物の言動などが議論されている。本発表は、作品の文学テクストとしての側面に重点を置き、マリー、ヴェーゼナー、そしてデポルトの「愛－性－結婚」がどのような関係を結んでいるかを分析する。自己決定を行うヒロインの結婚の失敗が、ロマンティック・ラブ・コードに対する各々の振る舞いの違いに起因した可能性を論じる。

２．愛による適切な関係――E. T. A. ホフマン『ダトゥーラ・ファストゥオーザ』について

中村 大介

E.T.A. ホフマンの晩年の作品『ダトゥーラ・ファストゥオーザ』（1822）は、60 歳の元教授夫人と結婚関係にある大学生オイゲニウスが、家の外で出会った女性ガブリエーラに魅了され、最終的には少女グレートヒェンと結ばれる物語である。これまでの研究では作中の学者や市民社会への諷刺の要素がもっぱら

注目されてきた（Vgl. Troggenburger 1983; Lemmler 2011）。主人公が作中で結ぶ関係は、母の愛、官能的な愛、「純粋きわまる愛」（Hoffmann 1992, S. 881）という変遷をたどる。本発表では作中の公私領域の緊張関係に着目しつつ、大団円に至るこの変遷を分析する。

彼が教授夫人およびガブリエーラと結ぶ関係は、公的な領域とは異なる、親密な領域を形成し、保持することに成功している。しかし前者では、当時忌避された年の離れた婚姻関係が取り結ばれ（Vgl. Wahl 2015）、また後者では邪魔になった教授夫人の暗殺が計画され、親密な領域の確保に伴う危険性の方が強調される。こうした関係から脱出し、オイゲニウスがグレートヒェンに告白する場面では、そこに外部から入って来た友人による 2 人へのコメントが加えられて幕を閉じる。彼らが最終的に到達する「純粋きわまる愛」による親密な関係は当事者だけで結ぶことはできず、他者の介入を成立の要件としているため、大団円の演出に疑問の余地が生じることを示す。

３．二人だけの結婚？――ジェーン・オースティン『高慢と偏見』(1813)に隠された矛盾

三觜 至音

18 世紀から 19 世紀初頭にかけて、イギリスでは貴族や地主のロマンスを描いた結婚小説が相次いで出版された。そのような小説では、結婚を巡って様々な政治的・社会的な思惑が交錯する中、時に親子の間で結婚の意向が異なり、せめぎ合いが生まれる様子が描かれている。小説内には様々な結婚の形が登場するが、中でも、ヒロイン達が、自分の親族や相手の親族から結婚を反対されたり、自分の望まない結婚を勧められたりといった試練を乗り越え、理想的な相手とのロマンティック・ラブを経て結婚という大団円を迎える流れは 1 つのひな形になっていた。このような小説の愛読者であったジェーン・オースティンは、その流れを汲んで『高慢と偏見』（1813）等、今日でも広く知られる結婚小説を世に送り出した。この小説の終盤では、政略結婚は跳ね除けられ、あたかも個人間の愛情の重要性を強調するかのような結末を迎える。一方で、オースティンは経済的、社会的事情を考慮しなければならないことにも意識的だった。作品において、その矛盾はどのように現れているのか。

本発表では、オースティンの書簡集や愛読書にも言及しながら分析を行うことで、親族同士の利害関係による政略結婚から、個人的情愛を重視する結婚へと移り変わる時代において、愛情を重視する『高慢と偏見』の限界を指摘する。それにより、ロマンティック・ラブが、その黎明期から孕んでいた矛盾を明らかにする。

４．ジゼル、ヒステリー、アラベスク

宮下 寛司

19 世紀バレエの代表作のひとつである『ジゼル』は、結婚を約束した貴族アルブレヒトによってジゼルが弄ばれてしまうという悲恋による死を描くが、彼女が死に至る過程はヒステリーの徴候を示しうる。ヒステリーとは女性特有の

病とされ、時として恍惚に似た身振りによってそのセクシュアリティを強く示すとされた。しかしこの診断はあくまで患者の身体的な身振りをみることで下されているに過ぎない。（Didi-Huberman 1997）恋愛関係が挫折したことで動揺したジゼルの身振りは、観客の視線に対してヒステリー的身振りとして呈示される。

精霊ウィリに変身したジゼルはアラベスクのポーズを多用する。アラベスクは主として女性が踊ることから、この作品では死を迎えた女性の恋愛感情が純化されたポーズとみなせるだろう。しかしアラベスクというポーズはその出来が必ずしも明らかではなく、ロマンティック・バレエに移行するまで女性特有のポーズとして用いられていたわけでもなかった。（Wittrock 2017）それゆえアラベスクは、異性愛的コードによって読解される女性性の象徴たりえない。そしてまた同時にヒステリーとして読解できる身振りでもない。ジゼルが踊るアラベスクは、その意味において彼女を憐憫の対象としてみる観客の視線から逸脱せざるを得ない異他的な身体像として現れるといえる。これがバレエ美学の「変容」であることを示す。

口頭発表：文学 、文化・社会 II（10:00～11:55）

B 会場（DB202 教室）

司会：粂田 文・Markus Joch

１. Japanische Thomas Mann-Rezeption zwischen Kulturheteronomie und Emanzipation – 100 Jahre japanische *Tonio Kröger*-Retranslation im Spiegel eines digitalen Topic Modeling –

Nicole Marion Mueller

Im Vortrag wird die Mitte 2024 im Metzler-Verlag erscheinende Dissertationsschrift vorgestellt, die Japans geisteswissenschaftliche Übersetzungskultur im 20. Jahrhundert am Beispiel der 15 zwischen 1927 und 2018 publizierten *Tonio Kröger*-Retranslations aufarbeitet. Dabei werden innere und äußere Übersetzungsgeschichte (d. h. Textgestaltung und Entstehungskontexte) in bisher nicht dagewesener Komplexität zueinander in Beziehung gesetzt. Möglich wird dies durch ein eigens entwickeltes, auf Topic Modeling basierendes digitales Analyseinstrument, das erstmals schwerpunktmäßig die Ähnlichkeits- und Einflussbeziehungen zwischen den unterschiedlichen Übersetzungstexten erfasst.

Hieraus ergeben sich wichtige Rückschlüsse in Hinblick auf die *kyōyōshugi*-Bildungselite als treibende Kraft der Thomas Mann-Rezeption, die eine am Deutschen orientierte Verfremdung japanischer Sprachnormen forcierte und so kulturheteronome Vorstellungen reproduzierte. Demgegenüber brachten insbesondere die 2011 sowie 2018

erschienenen *Tonio Kröger*-Neuübersetzungen von Hirano Kyōko und Asai Shōko einen Paradigmenwechsel, der auch in der digitalen Analyse sichtbar wird.

Gezeigt wird so am Beispiel von *Tonio Kröger*, dass Übersetzen 1) eine in spezifischen historischen Kontexten verortete Praxis ist, die sich 2) in Abhängigkeit dieser Kontexte wandelt und hierbei 3) inter- und intrakulturelle Einfluss- und Machtbeziehungen widerspiegelt.

Stichworte: Japanische Thomas Mann-Rezeption, Retranslation, Innere und Äußere Übersetzungsgeschichte, Digitale Geisteswissenschaften, Topic Modeling

２．イロニーと非合理主義の連続性――「再素朴化」から考えるトーマス・マンのファシズム理解と 45 年の告白

渡邊 能寛

トーマス・マン（1875-1955）のファシズム理解は、予てからの関心事であった「生（Leben）」と「精神（Geist）」の相反関係、それに起因する反省的自我の素朴喪失とその回復欲求等々への見識に依拠していることが指摘されてきた（Reed 1993; Kurzke 2010; Pikulik 2013）。作家の考えでは、“詩人と哲学者の国”におけるファシズムの勃興は、ロマン主義的感性を内面化したドイツ人が素朴の再獲得、すなわち「再素朴化（Re-Naivisierung）」を希求し、イデオロギーへの陶酔にその夢を託した結果なのである。

先行研究により上述のような理解が明確化されたが、他方で、ナチス・ドイツ降伏直後の講演『ドイツとドイツ人』（1945）において、「ドイツ人がファシズムに魅了されたのはなぜか」だけでなく、「再素朴化が失敗するのはなぜか」、「再素朴化を求めたドイツ人が野蛮化したのはなぜか」をも問われていることは顧みられてこなかった。これを受けて本発表では、第一次大戦初期の評論『《スウェーデン日報》編集部宛の書簡』（1915）を手掛かりに、当時自ら試みた再素朴化とその失敗を通じて獲得された認識がその後の政治主張を密かに規定した、というテーゼを立証してみたい。その認識とは次の通りである：イロニー化された精神の再素朴化は、必然的にニヒリズムを経由する以上、非合理主義的な決断に帰着せざるを得ない。

こうした洞察が成立した過程を、様々なテキスト―初期の短編から未完の評論、『魔の山』（1924）、その後のファシズム批判に至るまで―を通時的に検討することで明らかにする。

３．ナチス時代の通俗科学的著作における「人造石油」をめぐる言説の問題点――アントン・ツィシュカを例として

竹岡 健一

ナチズムと科学技術のかかわりに関する研究は枚挙にいとまがないが、資源という観点を交えたものはあまり見られない。また、ナチス時代の通俗科学的著作に関する考察も十分になされているとは言えない。そこで、本発表では、

当時ベストセラーとなったアントン・ツィシュカの 3 つの著作『科学は独占を破る』（1936）、『石油戦　世界権力としての石油の変遷』（1939）、『発明家は封鎖を破る　銃後の戦いと勝利』（1940）から、石炭液化法によって製造される「人造石油」を扱った個所を取り上げ、主に歴史的な事実と対照させながら考察することにより、その言説の問題点を明らかにする。具体的には、第一次世界大戦の結果と石油の過不足の安易な関連づけ、石油の枯渇を前提とした石炭の優位性の過度の強調、イギリスの商人根性とドイツの科学的英知の対置、石炭液化法の不採算性の度外視、戦争準備という目的の隠蔽、1939 年時点の石油自給率の誇張、諸外国への技術供与とアウタルキーの矛盾などについて詳しい考察を行い、そこに、事実を客観的に伝えるよりも、ドイツ人の有能さを実際以上に際立たせるというプロパガンダ的な意図があることを明らかにする。それにより、これらの著作は、第一次世界大戦の敗北や屈辱的なヴェルサイユ条約に不満を抱く人々の復讐心や名誉回復への願望に訴えかけ、第一次世界大戦の遅ればせの勝利を意味するとともに、第二次世界大戦の勝利を約束するものであったと結論づける。

口頭発表：文学、文化・社会 III（10:00～11:55）

D 会場（D101 教室）

司会：鈴木 伸一・白井 史人

１．シュリックの「怪物」、デーブリーンの「巨人」――「器官」を通じた自然とのつながりについて――

相馬 尚之

本発表では、作家アルフレート・デーブリーンの未来小説『山と海と巨人』（1924）における巨人の「器官」について、哲学者モーリッツ・シュリックの思考実験に登場する「怪物」との比較から、その特異性を探る。

1970 年代に再評価が進んだ『山と海と巨人』は、近年では技術と自然、そして人間の動態を描出した壮大な叙事詩として注目されており、2017 年の国際学会においても枢要な考究対象となった。特に、ヒトと多様な動・植・鉱物の混淆体である巨人は、そのグロテスクな形姿と社会に破滅をもたらす定めゆえに、デーブリーンの文明観および自然哲学との関連から幅広く論じられている。

本発表では、巨人の皮膚を突き破りヘビやポリープの姿で奇怪にうごめく「器官」について、ヘルムホルツ以来の「観念論哲学の（疑似）生理学化」との関連から再考する。シュリックは論文「宇宙と人間精神」（1936）において、視神経を耳に、聴覚神経を目につながれた「怪物」であっても通例の人々と同様に自然法則を導きうるとして、「構造的客観性」を擁護した。しかしデーブリーンの自然哲学において、器官は知覚の限界を定める「先天的≒ア・プリオリな」条件ではない。むしろそれらは、事物同士の直接的な結びつきを実現する点で、「有機的なもの」の存在様式の根幹である。そのため、『山と海と巨人』の巨人たちも、周囲の万物を飲み込み喰らい尽くすおぞましい器官を通じ

てこそ、自然と結びついているのである。

２．クリスタ・ヴォルフと1970年代東ドイツ――『どこにも居場所はない』におけるギュンダーローデ、ベッティーネ、そして周縁の女性たちの声

中村 祐子

クリスタ・ヴォルフの小説『どこにも居場所はない』（1979）は世界的成功を収めた『カッサンドラ』（1983）の影に隠れて重要視されてこなかった。しかしこの小説は、フェミニズム的テーマと語りの相関的発展においてヴォルフの転換点となっている。

東ドイツでは1970年代に文化政策が再び引き締められた。1976年のビーアマンの市民権剥奪は東ドイツの文学者たちに大きな衝撃を与え、初期ロマン主義への傾倒が起きた。この小説もその潮流のなかで（Emmerich 1996）、「両性具有性」、「ユートピア」、「誰が語っているのか」という、政治性を払拭したロマン主義的観点で主に論じられてきた（Braunbeck 1992, Scholz 2016, Klocke & Hosek 2018）。

これに対して本発表では、これまで注目されてこなかった周縁の女性たちに焦点を当てる。この小説では、ギュンダーローデとクライストの架空の出会いが描かれている。設定を1804年のティーパーティという「社交」空間にしたことで、様々な声は「流動的に」になった。語りの「ダイナミズム」（Hilzinger 2000）には、ギュンダーローデとクライストの対話というベースに二人を取り巻く女性たちの声が重なることが大きく関わっている。これらの女性たちの声は1970年代女性たちの「生きづらさ」と通ずる。ヴォルフは時代を移すことで女性問題を「社会主義の実現」という文脈から切り離して提示したのだ。これらの声により、語りが新たに「ポリフォニー」的特性を持ったことを論証したい。

３．Politische Propaganda im Schafspelz der DDR-Kinderliteratur

Sabine Randhage

Als fester Bestandteil des Alltags der Kinder und Jugendlichen in der DDR waren die Pionierorganisation „Ernst Thälmann“ sowie die durch diese vertretenen politisch-moralischen Grundsätze und Ideale desgleichen eine wiederkehrende Komponente der sozialistischen Kinder- und Jugendliteratur (KJL). Liegt der Fokus der vor- und nachwendezeitlichen Literaturforschung diesbezüglich jedoch v. a. auf der sich in den literarischen Werken widerspiegelnden sozialistischen Ideologie und auf eher allgemeinen Vergleichen der DDR-Pionierorganisation mit der Hitlerjugend der NS-Zeit (vgl. insbesondere Blumenthal-Barby 2006), konzentriert sich diese linguistisch fokussierte Forschungsarbeit ausdrücklich auf die sprachliche Darstellung der Pionierorganisation bzw. ihrer Repräsentanten in der DDR-KJL sowie auf die dabei

angewendeten linguistischen Überzeugungsstrategien zur politischen Indoktrination der jungen Leserschaft. Hier können wesentliche Unterschiede zwischen der real-sozialistischen Erbauungsliteratur (z. B. Heilbock: Wir tragen die Fahne) und vornehmlich fiktiven Geschichten aufgezeigt werden (z. B. Brock: Ich bin die Nele). Während in ersterer beispielsweise gewohnt propagandistische Parolen und ideologische Schlüsselwörter verwendet wurden („Kampf für/gegen …“, „Schulkampfwoche“, „fortschrittliche Menschen“), zeichnet sich letztere zumeist durch eine weit weniger direkte Propaganda und das Anschlagen eher leiserer, unverfänglicher erscheinender Töne aus, ohne jedoch vollständig auf bekannte, ideologisch aufgeladene Schlüsselwörter und Parolen zu verzichten („Klassenkollektiv“, „Pionierarbeit“, „Ein Pionier sagt immer die Wahrheit“). In diesem Sinne verbarg sich die politische Propaganda tatsächlich im Schafspelz der DDR-Kinder- und Jugendliteratur.

企画展示（大会期間中開催）
関口存男文例集展示　接続法を中心に

D204 教室

戦中・戦後期に慶應義塾でも教鞭を執り、数多くの後進を育成した不世出の天才ドイツ語学者・関口存男（1894-1958）が、膨大なドイツ語文例集を作成していたことは広く知られている。この文例集のオリジナルは現在慶應義塾大学日吉キャンパスに保存されているが，2016 年以来，義塾の院生が主体となりスキャン作業・Word ファイルへの文字起こしに取り組み，このデータベース化を進めている。本企画展では，この試みの一部として，関口の文例集から接続法についての記述部分を書き起こしたものを公開し，この関口文例集の内容が特に氏の著書『接続法の詳細』にどのように活用されているかを紹介する。